ルポライター
滝川 康治

“農と食”北の大地から

連載第72回

中高年による新規就農 その現状と課題を探る

深刻化する道内の担い手不足 多くの人が参入しやすい環境を

農業人口の減少と農家の高齢化が急速に進むなか、農村地帯では担い手不足を嘆く声をよく聞く。その一方で、都市部の中高年のなかで農業に関心をもつ人が増え、「さっぽろ農学校」などの人気も高い。道が創設した「希農塾」の受講生や就農を実現した人たちの話を交えながら、中高年の農業志向と生産現場とのギャップを埋め、北の大地をより輝かせるために何が必要かを考える。

集合研修の一環として帯広市の「やぶ田ＦＡＲＭ」を訪れ、有機野菜の栽培について耳を傾ける「希農塾」の受講生たち。座学では農業技術の基礎を学び、就農への意識づけにつなげている(写真右下)

道が初の研修コースを開設 「希農塾」で農業の基礎学ぶ

十勝晴れの日が続く十月下旬、道立農業大学校の中高年向け就農研修「希農塾」の受講生たちが、帯広市内の「やぶ田ＦＡＲＭ」を訪れていた。研修の一環として、大阪から移り住んだ経営主の藪田秀行さん(195 6年生まれ)の話を聞き、農場の様子を見学する企画である。

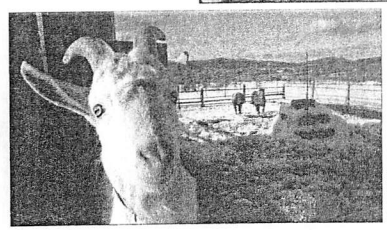
ここと清水町内に合わせて五ヘクタール余りの農地がある。多品目の野菜類などを有機栽培(ＪＡＳ認証も取得済み)し、農産物や加工品を直接、消費者の元に届けてきた。

受講生からは、「このハウスで栽培する野菜は?」「農業を始めた時期や今までの経過は?」という質問が相次ぎ、藪田さんが関西人らしい快活な語り口で答える。農場内の直売所で買い物をしたり、畑の野菜を試食する場面もあった。

十勝管内本別町にある同校は、農家の子弟らが寮に宿泊しながら、農業の技術や経営、機械の操作などを学ぶ研修機関。定年もしくは早期退職して道内で新規就農をめざす中高年を対象にした「希農塾」は〇七年度から始まった。道がこうした研修コースを開設するのは初めての試みだ。ＰＲ不足もあり初年度の受講生はゼロ。〇八年度は札幌や旭川から訪れる三人が研修に励む。

作物栽培や機械操作の基礎を身につけることが研修の目的。集合研修(2日間ずつ年2回)と通信講座(3回)、農業機械の利用研修(1回)の三つがセットになっている。

道立農業大学校の「希農塾」では農産物の販売現場も見学(やぶ田ＦＡＲＭで)



定年帰農の草分け、仁木町の「ヘルシー果樹園」ではヤギとポニーが仲良く暮らす

「目標は、就農後に『何を作るのか』『どんな農業形態をめざすのか』『どう販売するか』について、意識づけしてもらうこと。事前の面接はなく、四十代以上で就農をめざす人は誰でもウエルカムです」

と、講師役の同校教務部主査・林弘幸さんが説明する。前日の座学では、農産物の価値を宣伝することの大切さを説き、「農業で一番弱いのはマーケティング力。それが身に付くと鬼に金棒だ」と強調していた。

都市周辺での野菜づくりへ 今後の生き方を探る人たち

受講生の五十嵐澄夫さん(57年、旭川市生まれ)は今年春、三十二年におよぶ横浜市内でのサラリーマン生活にピリオドを打ち、就農をめざして帰郷した。これまで培った空調関係の業務経験も生かしつつ、旭川かその周辺でハウス野菜にチャレンジできないか模索中だ。

「親が水田農家だったので高校まで作業を手伝い、農業のきびしさは分かっています。趣味的な農業ならば定年後でもよかったんですが、生活の糧にするには〝五十の手習い〟がリミットかな、と思った。組織に守られているのとは違い、農業は自分でやる・やめるを判断できる仕事。サラリーマンとは違う充実感があるんじゃないか」(五十嵐さん)

子どもは独立している。上川支庁主催の農業研修や同校の別のコースも受講し、「顔を出すことで若い人と知り合え、モチベーションを維持できる」と意欲を見せる。

札幌市の検査技師、佐々木雅博さん(58年、同市生まれ)は、さっぽろ農学校やＮＰＯ法人の活動(08年9月号「都市農業のすそ野を広げる『さっぽろ農学校』」参照)に参加する一方、農業大学校にも通う熱心な受講生だ。遊休農地を借りて札幌市内での就農をめざすが、その土地を探すきっかけがない、という。

いまは少しずつ実習を重ねている。「インターネットで検索し、少ない労力でもやれる方法を探しています。直売はあまり考えず、既存の流通にも合う技術レベルのものを作ることを基本にすえたい。少しずつ軟弱野菜に取りくみます」(佐々木さん)

と四～五年先を見すえながら、これからの生き方を探っている。

「希農塾」の知名度が低いことに加え、就農をめざす人は都市部に多いので

十勝は遠く感じるのか、受講生は少ない。もったいない話だ。この企画を活用できる機会をもっと増やせないか、と思った。

10年前にゼロから出発して有機農業や直販態勢づくり

前出の藪田さんは、学生時代に農業のおもしろさを感じとり、就職後もずっと就農のチャンスを窺ってきた。九四年に帯広市主催の農業塾（2年間の通信教育）を受講したことをきっかけに、九八年に移住。研修中に知り合った愛国地区の農家が受け入れ組織をつくってくれた。ここは十勝農業の一等地。「新参者には農地取得は困難ですが、奇跡的に就農できた」と振り返る。

十年前、家庭菜園の講習会に参加したが内容を理解できず、「なんと情けない」と落ち込んだ。肥料、種子、播種方法…すべてがチンプンカンプン。年配の農家に「何をしたらいいのか？」と尋ねると、「ホウレンソウでも作っておけ！」。教えてもらいながら、少しずつ歩を進めた。勝手が分からず、がむしゃらに働き、血尿が出たこともあるという。

そんななか、芽室町内で農薬や肥料を使わず自然農法をやっている人のところで実習する機会を得た。

「草だらけの畑に家族三人が這いつくばって仕事をしていた。その野菜が日茶苦茶うまく、『哲人だ。俺もこんな人になりたい』と思った」

だから、ずっと有機農業を追求し、総菜業の許可を得て近年は加工品にも力を入れる。販売はすべて自分で手がけ、農協や市場には出荷していない。「サラリーマン時代を思い出すので、彼らを相手にするのは嫌なんだ」。自由闊達な人柄に惹かれてか、直売所は来訪者のサロンのようになっているらしい。

農場の一角に古びた小型トラクターが見える。土に埋もれていたものを五千円で買い取り、自分で修理した。ど根性がある人だ。就農を志す人には、こうエールを送る。

「人の助けを必要とするときもあるけれど、やれないことは何もない。『できない』や『分からない』は答えじゃないよ。妥協をせず、自分の道を進んでほしい」

近隣に新規就農者が二組いる。藪田さんは自分の経験をすべて伝え、声援を送ることを忘れない。

二十日大根を丸かじり。デジカメに収める受講生の五十嵐澄夫さん

「就農をめざす人は妥協せずに進んでほしい」と話す藪田秀行さん

ヤギを飼って健康を保ち仲間たちとの交流も広がる

この連載で道央の農村地帯に移り住んだ人たちの営みを『『定年帰農』の可能性』と題して紹介したことがある（03年4月号）。あれから約六年、その後の定年帰農の日々について聞くために十一月下旬、わたしは二人の登場人物を訪ねた。

日本海や余市の町並みを望む後志管内仁木町のゆるやかな丘陵地帯。農業高校の教員歴が長かった中園稔さん（37年、福岡県生まれ）が経営する「ヘルシー果樹園」では、ワイン用のブドウやリンゴ、サクランボなどを栽培するかたわら、小動物も飼う暮らしが続いていた。

「リンゴや野菜をヤギに食べさせるとミルクを出してくれるし、健康にも役立つ。生産に追われて一喜一憂する人よりも、本当の百姓として自給に近づくことができました。十五頭のヤギの瞳は自分の孫以上に愛らしく、癒しになっていますよ」

と中園さんは笑顔で話す。余市高校園芸科で教鞭をとっていた四十八歳のとき、妻の昌子さん（43年、函館市生まれ）が経営主になって五ヘクタールほどの離農跡地を取得した。定年帰農のパイオニアである。

もともと動物好きで、教員時代から牛を一頭飼って乳を搾り、アイガモを池に放したりした。ヤギの飼育は十五年ほど前から試み、経済動物としてよりも、子どもたちの情操教育や自然環境を守る視点を大事にする。清水町で「山羊サミット」を取材した六年前、「見覚えのある顔だな」と思って声をかけたのが中園さん。わたしの高校時代の恩師の一人、じつに三十年ぶりの再会だった。

ヤギの飼育には、持病の糖尿病をかかえる自分自身の健康づくり、という目的もある。母乳に近くて消化が良く、アレルギーを起こしにくいヤギの乳には、糖尿病にも効果があるとされるタウリンが多く含まれるからだ。みずから乳を搾り、夫婦で毎日二リットルを飲む。冬場にはヤギ乳のチーズを作り、自家用にしたり、知人への贈り物にする。

「定年から十年、ずっと飲み続けて白内障が消えました。老化現象も抑えていますよ」（中園さん）

肌はツヤツヤしており、とても七十歳とは思えない。

十月には京都で開かれた「全国山羊サミット」に参加し、交流を深めた。すでに三十頭のヤギを道内各地や青森、川崎などの仲間たちに譲り、そのネットワークを広げている。

「しりべしなんでも百姓ぐらぶ」の一員として小樽の都通り商店街での直売会に出品したり、赤井川村の「ホピーの丘観光牧場」で果物を販売する――。中園さん夫婦は張りのある生活を送ってきた。

かつての同僚たちで農的な暮らしに夢をいだく人は多かったが、実践した人はきわめて少ない。土地や住宅、農業機械に退職金の大部分を投じなければならないからだ。

「半数以上の家庭は奥さんが（就農に）反対し、『老後の生活ができなくなる』と考え実現できずに終わる。老後を心配してマンションで暮らす人生はつまらない気がしますね」

農場をどう継承するか聞いてみた。

「生活の豊かさや景観の良さを目にして、『こんなところで暮らしたい』となれば、必然的に引き継ぐ人が現れます。日々、そう思われるような農場を築いていくだけで、あとはその人の情熱に任せたいですね」

と、きっぱり言い切った。農作業に汗を流し、小動物を飼育することで健康を保ち、出会った人たちとの交流の輪を広げる――そうした生き方から教えられるものは多い。

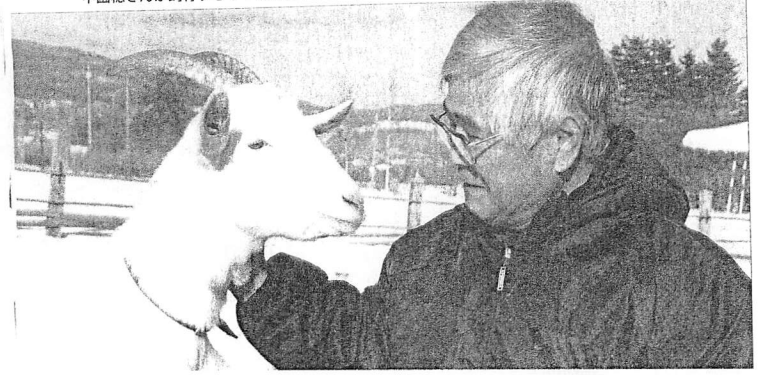
会員向け販売に力を入れてゲストハウス通じて恩返し

脱サラして石狩市高岡地区に移り住んだ田中勝吉さん（45年、愛知県生まれ）は、八年前に同市の新規就農第一号に認定された。二ヘクタールの農場では、さまざまな野菜類を無農薬で栽培する一方で、百坪ハウスが五棟、八十羽ほどの鶏も飼う。

そして、農場の生産物すべてを直販でさばいている。

「晴耕雨読での自給生活」が長年の夢だった田中さんは九九年、定年前に退職する道を選び、札幌にある㈳北海道農業担い手育成センター（宮田勇理事長）を訪ねたことをきっかけに、ここへ移住した。

中園稔さんが飼育するヤギは人なつっこい。「15頭のヤギの瞳は自分の孫以上に愛らしい」と相好を崩す



①家族と仲間のために安全と味を追求する
②新しい農業の方法を積極的に取り入れる
③体力が落ちてもできる農業を模索する

この三つが農場のモットー。「仲間のため…」では、会員向けの販売に力を入れてきた。現在の会員数は百二十人。全員が道外在住者で、出身地や学生時代の友人・知人、転勤先で知り合った人が九十人ほど、あとは口コミで広がった。

自家産の野菜類を中心に、近隣の農家仲間が作ったメロンや有機玉ねぎも入れて送る。あとは、農場で販売したり、農協の直売所へ。〝顔の見える関係〟を大事にしている。

「喜びは、お客さんが『美味しかった』と言ってくれること。〝稼ぐ農業〟に特化すると、自分たちが描いた生活とは違ってしまう。〝やりたいこと〟と〝実際の農業〟をどう調和させるかですね」(田中さん)

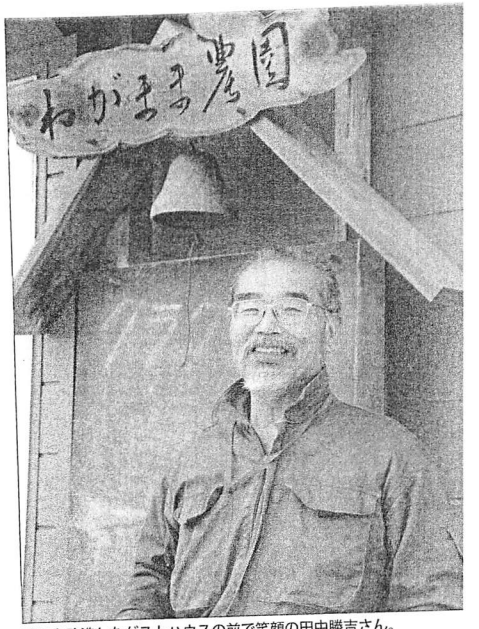
数年前に二階建ての納屋をゲストハウスに改造した。農場の収穫祭や新規就農した仲間たちとの交流会、訪問客のパーティー、小学生の課外授業などに使われる。

「僕らを気持ちよく受け入れてくれた地域の人、お客さんに対する恩返しのような気持ちでやっています」

昨年、心臓病を患い、大手術をして農作業に復帰した。それもあって体力が落ちている。養鶏部門などを担当してきた妻の民世さん(49年、愛知県生まれ)の夢は、ハーブ栽培やガーデニング、ケーキづくりなどをすること。それを叶えさせてあげたい、という思いもある。

「心配なのは体力だけで、ほかに不安はありません。これからは、人手を頼んだり、体力に応じたやり方をする、加工も手がける——といった農業に転換を図りたい」

と、田中さんは営農スタイルの転換を模索していた。


納屋を改造したゲストハウスの前で笑顔の田中勝吉さん。就農してから8回目の収穫を終えた

中高年就農に農地取得の壁 〝入りやすく、出やすい〟道を

道農政部の調査によると、道内の新規就農者数はここ七年ほど七百人前後で推移してきた。若い世代のUターン就農の比率が高まる一方で、五十代以上で新規参入する人が増える傾向にあるという。

「就農研修や体験実習について、五十歳以上の相談件数が増え、札幌周辺の人が多い。食の問題が取り沙汰されるなか、有機農業や低農薬栽培をめざす人が目立ちます。中高年は資金がある人が多いので紹介しやすい半面、受け入れる市町村では若い担い手を求めるところが多い」

近年の傾向や地元側とのギャップについて、道農業担い手育成センター主幹の富樫一彦さんはこう説明する。既存の支援システムでは四十六歳未満でないと就農関連資金の貸し付けや助成が受けられないため、市町村の移住担当窓口へ相談に出向く人も多いという。

北海道でも農家戸数は減り続け、農業就業人口は十二万三千人(07年度・前年比3・1%減)。高齢化が進み、六十五歳以上の農家が三分の一を占める。十年先を展望すると、担い手不足は深刻化する一方だ。

「北海道は全国平均よりも農家の高齢化率が高く、石狩市の農家の平均年齢は六十六歳。『農家じゃ食えない。子どもには薦められない』と思っている人も多い。血のつながりではなく、その土地を守る形にしないと農村は崩壊してしまう。『農業をやりたい』という中高年層をうまく農村に入れ込んでいくべきです」

と、石狩の田中さんが指摘する。

誰もが「後継者難で大変だ」「担い手がほしい」と言うが、中山間地や僻地を除くと、就農を志す中高年には農地を入手しずらい状況もある。

「札幌周辺の農家は(資産価値がある)農地をなかなか手放しません。野菜づくりをめざす人は条件のいい地域を希望するけれど、農地価格が高い。十勝では品目横断的経営安定対策の影響で農地の囲い込みが始まり、(周辺農家が使うので)土地が空かない」(前出の富樫さん)

小面積での自給的な農業をめざす中高年の人たちと生産現場とがミスマッチを起こしているわけだ。田中さんはこう提案する。

「多額の投資をしなくてすむシステムがあると農業の世界に参入しやすくなる。〝入りやすく、出やすいシステム〟を地域で創っていくと、結果的に定着する人が出てくるでしょう。その人たちの仕事が回転できる程度の農業施設を造り、共同作業の一員として働く。農地を小分けして菜園を造る——といった方法もある。そんなスタイルをここで創りたい」

移住受け入れの態勢づくりや情報提供の充実が急務だ

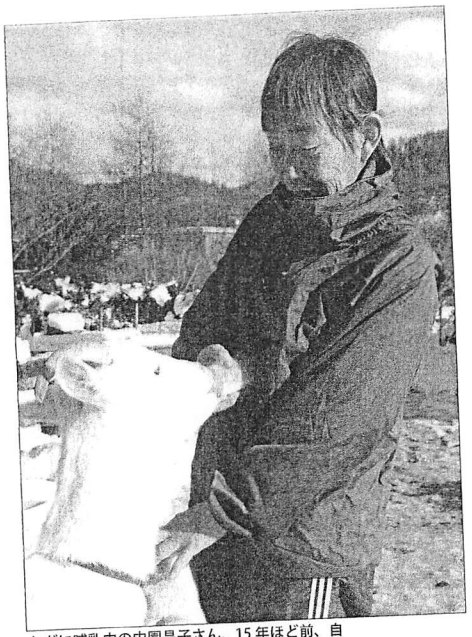
中園さんは、「よそ者が生活しやすい環境づくりが大切」と強調する。そのために行政や農業団体が村おこしなどの研修を実施し、それを受けた人たちが移住者を受け入れるグループを創ることを提案していた。

「仁木や余市には、定年まで二、三年を残して移住し、果樹園づくりをする人がいる。『ここで暮らしたい』という人が増えれば、地域も活性化するでしょう」(中園さん)

都市住民を受け入れる「一農家一世帯運動」を提唱する岩手県葛巻町の鈴木重男町長は、「土地を一反歩(300坪)無償で提供するので、ぜひ住んでください」と講演などで呼びかけている(12月3日付け『農業共済新聞』)。地域経済の活性化や町の元気度アップを狙ったものだ。北海道でも参考にしてはどうか。

冒頭の「希農塾」もより充実させるための工夫が必要である。農業サイドに対する受講生の募集だけでなく、「農的な暮らし」に興味をいだく道内外の中高年層にもっとアピールすべきだ。道企画振興部地域づくり振興局は「北の大地へ移住情報」のホームページを開設しているが、そこに希農塾やさっぽろ農学校、自治体の農業講座の情報などはリンクされていない。この程度のことは、すぐに改善できる。縦割り行政からの脱却に期待したい(担当者にはその旨を伝えた)。また、農業大学校は地の利が悪く、気軽に受講しにくい。帯広や札幌圏などの関係機関との連携も必要ではないだろうか。

専業・大規模経営だけが北海道農業ではない。多様な「農と食」の営みが共存して初めて、この北の大地はより輝く。就農をめざす中高年が参入しやすいシステムづくりを創りあげてほしいものだ。


ヤギに哺乳中の中園昌子さん。15年ほど前、自分の名義で農地を取得して農業を始めた

■北海道立農業大学校 研修室
本別町西仙美里25—1
TEL 0156・24・2700
FAX 0156・24・2421
http://www.agri.pref.hokkaido.jp/college/index.htm

■やぶ田FARM
帯広市愛国町基線22—9
TEL・FAX 0155・64・4263
http://www008.upp.so-net.ne.jp/YABUTA-FARM/

■有畜自給農場「ヘルシー果樹園」
仁木町東町4—95
TEL・FAX 0135・32・3036

■わがまま農園(田中勝吉代表)
石狩市八幡町高岡87—3
TEL 090・7051・5192